

情報機器を用いた大学基礎教育の実践報告

塩田 公子

文学部文化情報メディア学科文化メディア専攻

(2002年9月12日受理)

The Present State of Basic Education using Information Technology

Faculty of Humanities, Department of Humanities and Information,

Major in Cultural Studies and Information,

Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

SHIODA Tomoko

(Received September 12, 2002)

はじめに

2001年4月に岐阜女子大学英文学科・国文学科は30余年の歴史をふまえて、新しい時代のニーズに対応していく人材の育成を目的として、文化情報メディア学科を開設した。

社会的にも情報技術の進歩はめざましく、さまざまな局面において、情報機器を用いた方が、より早く、より楽に、より高度に、より効果的に、思いつく限りの「より・・・」が我々を包み込もうとしているかのごとき変化が、この数年で大学教育の現場をも襲った。まさに襲ったといって言い過ぎでない、早さとすさまじさである。

この夏、20年続いた、「北の国から」というテレビドラマが終結をした。私もその一人だが、多くの人がこのドラマに自分の成長や、子育てや、直面する人生の課題を写しながら、喜怒哀楽の涙を流してきたと思われ、この夏の終わりに人々の関心を惹いた一つの出来事だった。このドラマの中で純を演じた吉岡秀隆くんは、このドラマが始まった同じころ、「男はつらいよ」シリーズで、寅次郎の甥満

男を演じ始めた。その彼があっという間に、「男はつらいよ」のドラマのなかで、就職活動をする大学生を演じ、毎日毎日履歴書を手書きし、試験を受け、大学入試とはまた違った論理で(むしろ大学入試の方が理屈が通る)不採用になり、そんなことを繰り返す満男の苦悩を通して、就職難の世相を映し出していた。それは1993年(第48作「寅次郎の縁談」)のことであった。主演の渥美清さんが亡くなり「男はつらいよ」は1996年に終わった。が、そのこととは無関係だが、それから7年、大学生を巡る状況はよくなるどころか、ますます新卒の学生の就職率は下がり続け空前の失業率を記録する今、手書きで履歴書など書かないのだそうだ。学生が理想とする大手企業、一部上場の会社は、今やインターネットで採用のエントリーをしなければならぬし、企業側の要求してくる、レポート、アンケートなどは、みなウェブ上でやりとりをしなければならないのだそうである。「いつの間にそんなことに」とあっけにとられていては、無論いけないのだが。それはさておき、公教育においても来年度から、高等学校に情報の科

目がおかれ、子供たちを取り巻く情報教育が完備され、国民のだれもが、鉛筆や消しゴムや、手帳など身の回りの学用品を使うごとくに、パソコンを使いこなしていける時が、あっという間に来てしまう、また来てもおかしくない昨今の世の中の動きである。

そんな、社会情勢を受けて、情報機器を個人の知的な武器として身につけることは、これから生きる若い学生達に不可欠な条件であることは否定できないようである。

(1)

このような社会の動きに対応し、新しい文化情報メディア学科では、開講に先立つ2000年度から、関係教員は自分の学問のみでなくウィングを広げ、この新しい局面に対処するべく新しい一歩を踏み出した。が、自分の学問も満足に成果が上げられない悩みに加わり、生涯きつと友だちには成らないだろうと思っていた種類の人と同居する羽目になったごとく、もっとも苦手な機械(情報機器)とつきあうという事は、相当な苦行であった。

しかもなぜか、このパソコンという機械(!)道具(!)は、日頃何とか使い慣れている、電話やテレビやビデオデッキや、掃除機などの機械にくらべて、はるかに操作がむづかしい、これらでさえも人により得手、不得手があるわけで、パソコンとなると格段にその差が広がる。しかも、若い人はもの覚えがいい。彼・彼女たちのスピードに私などがついて行こうなどと思うことがそもそも間違いだという世界に身をおいた。

しかし、なにか今までできなかった事ができるかもしれないと言う期待もわいてきたことも確かである。私の専攻する日本文学の研究の現状でも、IT革命の波は確実に押し寄せてきていて、『源氏物語』『国歌大観』などの検索も楽になった、辞書もCD-ROM化し、

折から細かい字がみえなくなりつつある私は、角川の『古語大辞典』のCD-ROMは近年にはないぐらい、投資効果の高い買い物であったし、重い辞書を持ち上げることによる腱鞘炎発病の恐れもなくなり、また、博物館や図書館に出かけて行かなくても、居ながらインターネットで美しい画質でデジタルアーカイブされた、絵巻や写本が見られるようになったし、何よりも、論文や日々の事務文書がワープロ文書で作成できることは、日常業務にまわりつくさまざまな面倒を一気に解決してくれた。

しかし、自分が今まで続けてきた日本文学の学問分野で、さてどのように情報機器を用いて研究、教育に活かしていけるかを考えた時に、柔軟性にかける私の頭はとまってしまった。私は現在、笠間書院の「中世王朝物語全集」の中に収められる予定の、『夢の通ひ路物語』の注釈作業をしている。そのためには、辞書CD-ROMの力を借りるし、ワープロを使用した草稿は、中味の出来とは無関係に整然と立派な様相を呈している。しかし、情報機器が役に立つのはそこまでのことで、注釈の中味をいかに充実させられるかと言うことは、ひとえに私の知識量と読みと判断力に頼るしかない。それゆえいかに情報環境が整ったとしても、注釈作業が、私のような未熟なものには難行苦行であることにいささかの変わりもないのである。

そんなことに悩んだ末に、情報機器を取り入れるための活路は教育しかないのではと考えはじめた頃に、幸運にも、大林組のOJEシステムを知った。といっても理論的なことは未だに勉強不足でわかっていないのだが、この情報システムを教育に導入すれば、今まで20年以上女子大の教育現場で不便だと感じてきた様々な局面や、もっと良くしたいと思っていた希望が叶うのではないかと感じた

のである。

大林組の浜嶋氏は、共同研究の申し出に理解を示して、教育者としての私の思いをじっくり聞いて検討を重ね、このような教育支援用のシステムに作りあげてくれた。今後は、これを使って、従来の教育現場ではできなかった事が少しでも実現していけば、それはまさしく、文化系の研究者が情報と係わりながら前向きに生きて行ける活路であると思っている。

(2)

現在「Campus Partner」と名付けられ大林組から2002年7月に販売されたこのシステムが、まだ試行段階の手作りのシステムのころ、2001年9月に基本的機能や、システムを用いる教育で何を指すのかという観点で、私が所属する研究会で発表した、多くの日本文学研究者には今一つ共感を得ることができなかった。それは、実際にどのような事ができて、日本文学、あるいは広く文学の素材がどのようにこのシステムを使って教育していけるかというコンテンツに関する観点が私の発表に欠けていたことも一因だった。

今年度は大学における講義「日本語表現の基礎Ⅱ」という科目でこのシステムを使った講義をした。

現在、岐阜女子大学に限らず、多くの大学の教育現場では、日常生活レベルの日本語の表現でさえ危うい状況の中で学生達は生活をしていると言われている。就職で自己アピールができない学生や、手紙やレポートや論文が十分書けない学生が多いと聞く。

われわれが専門の学問を自己の研鑽で深め、それを教育現場で教育を通して広めかつ深めていくためには、この基礎の日本語の表現能力を高める必要があると切実に感じる昨今である。特に私個人にかぎっていえば、もっ

と別な人生を歩きたい希望をたくさん持っていたにもかかわらず、日本文学、しかもまだ研究の端緒についたばかりの「鎌倉時代物語」の研究を選んだのであるから、この自分の人生を無駄にしないためにも、「鎌倉時代物語」を読んで愛してくれる人を一人でも増やすことが、自分の人生の価値を問うための大切な営みであるから。

(3)

この「日本語表現の基礎Ⅱ」という科目は、自己表現の豊かさを身につけることを目的として、新学科のカリキュラムに設けられた。

その目的を達成するために、また同時にこの情報化が益々進んでいく時代のなかで、必要な情報リテラシーを身につけるといふ一挙両得(表現が軽薄だが)のためには、どのようなプログラムで行ったらいいかを思案することが、一番大切な課題である。

「日本語表現の基礎Ⅱ」という講義は、「聞く」「話す」「読む」「書く」を大切にする事が基本なので、素材は耳で「聞く」「落語・茶漬け閻魔」を入り口として、「書く」所までを網羅するためにすべて現代語をベースにした講義にした。

私は古典文学を専門としているので、是非次は、古典文学を素材にした講義をこのシステムを使って行うプログラムを考えて見たいと思っている。個人的な感想と結論からいうと、従来の講義形式より、はるかに学生と教員との距離が近くなり、教材や、資料等が教員側から一方的に提供されるのではなく、学生の側からも発信される環境が確保されているので、授業展開が面白くなったと考えている。

そこで、このレポートでは、このシステムを使って行った、前期の「日本語表現の基礎Ⅱ」の実践報告をする。

(4)

まず、この講義の為に使用する、本システムについての概要についてしるす。

このシステムを開発しようと考えた理由を以下にまとめておきたい。

1 最近の大学教育現場の現状(日本語の理解に必要以上に欠ける学生が存在するということ。)

2 教育現場の情報化の必要性

就職等の必要性も考え、高等学校等における情報教育完成までの移行期における大学の情報教育は、情報の技術の習得とコンテンツの充実との両方が求められる。

3 (情報を主とする学科に身を置きながら、文学を教える)大学教師としての立場から望むこととしては、

(1) 自分の研究・教育活動の場において必要なすべての機能。

(2) 学生が文学研究しながら(あくまでも文学を学ぶ事を主体として)かつ自然に情報機器をあつかう技術を身につけるプログラムを考えることができる機能。

(3) 教師が一方向的に知識・情報を学生に伝達するのではなく、双方が学びあい、講義に主体的にかかわることができる機能。

上記に述べた機能を併せ持った情報システムが欲しいが、既製のものでは使い勝手がわるい。教科書も自分が本当に希望する講義をするためには、既成の教科書がいかに使い勝手が悪いかを今まで何度も味わってきたように、現在使える情報手段(企業用管理ソフト、メール、インターネット等)では不十分な場合は、自分の教育目標にあったものを作るしかないと考え至ったことによる。そこで、はじめに述べたように、株式会社大林組、エン

ジニアリング本部、情報エンジニアリング部の研究者で、名古屋大学理工科学総合研究センターはじめ、大阪市立大学、神戸大学等で講義を担当している、浜嶋鉦一郎氏と共同で開発したものである。

(5)

このシステム作成の試行と経過は以下の如くである。

1 2001年6月 岐阜女子大学での試行版システム導入と学生への説明ガイダンス

2 7月 学習環境総合展出品(大阪)

「ITで想像する新しい学習環境、学生生活」

3 9月 古代文学研究会(文学系研究会)でシステムの発表(塩田)

4 12月 立命館アジア太平洋大学システム部門との意見交換

5 2002年4月 新システム試行開始(Campus Partner と命名)

6 5月 関西学院大学大学院総合政策研究科リサーチ・コンソーシアムポスターセッション(浜嶋)

7 2002年6月 愛知県尾張地区国語教育研究会 講演 「情報機器を用いた日本文学教授法の実践報告(塩田)

8 2002年8月 古代文学研究会大会発表 「情報機器を用いた大学基礎教育の実践報告(塩田)

9 2002年9月 名古屋女子大学 講演 「「Campus Partner」の理論と文学研究における利用の実態(浜嶋・塩田)

(注)本システムの概要、機能

本システム自体の概要や機能に関しては、別な論文を用意しており、ここでは、本学における教育実践報告としての論であるので、別稿に譲ることとする。

(6)

本システムを用いて行った該当講義の概要について記す。

1 授業科目 日本語表現の基礎Ⅱ
(文化情報メディア学科2年 半期2単位
講義時間15時間)

文化情報メディア学科は必要な講義で使用することを前提に全員個人のノートパソコンを携帯させた。またそのパソコンは、学内の無線 RAN カードを使用しウェブに繋がっている。

2 シラバス 省略

3 目標 「真に理解すること、わかること」とは、どういうことか？そしてそのためには今自分がどんなことに、またどれくらい努力をしなければならぬかということ認識すること。

上記の目標を達成するためには、以下の(1)から(7)のそれぞれの細目が個々に達成されることが必須である。

- (1) 意識を集中して聞くことができる。
- (2) 聞いたことが正確に、理解できる。
- (3) 聞いたことを正確に表記・再現できる。
- (4) 書かれたものを正確に読みとる事ができる。
- (5) 自分の意見を的確に話すことができる。
- (6) 自分の意見を的確に表現して書くことができる。
- (7) 上記(1)～(6)の目的の達成のためには努力を惜しまず、心の弱さにながされず、自らを卑しめることなく、知的好奇心の向上をめざすことができる。

4 方法 上記に掲げた学習の目標を達成す

るために、情報機器(本システムを中心に様々な情報機器)を最大限に用いてなにかできるかを教師としての立場で考えて以下のような基本姿勢を決めた。

まず、素材の選択であるが、最も基本的かつ重要な言語活動として、耳で聞くことを重視する。そのためには、音声教材である「落語」を素材とする。「落語」は笑いが背後に聞こえることから、他者の理解と自分の理解の差がみえるので、最適と思われた。

次に、講義時間毎に、講義の各シーンでシステムと情報機器を用いるための技術習得ができる工夫を施すことである。

*以下本文の中でシステムという表現はすべて本システムを指す。

また本システム内の各ページの名称および機能は『 』に入れて表記した。

5 教材、素材について

ここで、教材として取り上げた「落語『茶漬け閻魔』について、簡単に概説しておく。

これは、今は亡き上方落語の巨匠(と私は個人的に評価している)桂枝雀のために、落語作家の小佐田定雄氏が作り、1982年に初演された新作落語である。

内容は、キリストや釈迦が集まる町内の寄り合いの飲み会の翌日二日酔いをして、茶漬けを食べている閻魔のところを「松本留五郎」がおとずれ、閻魔庁に登庁する閻魔についていく。そこで極楽願望の留五郎は罪状の点数計算をしてもらい、なんとか極楽へいくが、蓮池で地獄の血の池へ蜘蛛の糸の釣り糸をたれて、亡者を釣っている釈迦と出会い話をする。極楽からのぞき見る地獄の享乐的な様子を見て浮かれて踊っているうちに、蓮池から足を滑らして血の池地獄へ落ちてしまう。善人の釈迦は、折からやってきたキリストと一

緒に、キリストがオリブ山から昇天したときに使った古い縄ばしごをつかって地獄へ助けにくるが、はしが切れて釈迦とキリストは血の池地獄へ真逆様。地獄の赤鬼に笑われ、釈迦の釣り糸の蜘蛛の糸をたぐって極楽へもどろうとするが、釈迦とキリストの後について上ってくる留五郎を見て、「留五郎は罪があるからけ落とせ」という釈迦の自他の区別をする言葉に、蜘蛛の糸は切れてしまい、釈迦とキリストはふたたび血の池地獄へ逆戻り。キリストの、「ああ、神も仏もないものか!」という言葉がこの落語のおちである。

この落語自体は、原作者の小佐田定雄氏が「作者も演者も、はっきり申し上げてそんなに真剣に考えてこしらえたり、演じたりはしておらんですよ。(枝雀落語らいぶ「茶漬えんま」解説)で言っているように、他愛もない娯楽であるが、それでさえ、芥川龍之介の著名な作品『蜘蛛の糸』をベースとして、釈迦やキリストにまつわる知識や、地獄、極楽などといった、当然の知識・教養や、枝雀初めとする上方落語の世界にかんするマニアックな知識にいたるまで、幅広い知識がなければ、この落語を100%面白く鑑賞することができないのである。

ひとつ付け加えると、この講義のなかで取り上げるまでは、『蜘蛛の糸』を読んだことのある学生はほとんどいなかったのである。

この教材を使って行う講義の学習目的としては、

- (1) 落語を聞いて、その面白さを十分理解することができること。
- (2) 落語の中に出てくる、様々な知識を理解する、その知識を会得するためにどのような方法があるかを学び、実践すること。
- (3) 落語のベースに使われた、日本文学の名作を読み、鑑賞して、落語との違いをか

んがえる。

6 次にこの講義を通じて、情報機器とシステムの利用を促進するプログラムを以下にします。

- (1) 音声教材をパソコンであつかう
 - ・落語のCDをコピーする。
 - ・CDをパソコンで聞く
- (2) CDを聞きながら、日本語入力をする。(タイピングの練習)
- (3) システムの「レポート提出機能」の使い方の習得(ネットで情報を発信することをおぼえる)
- (4) 「講義ページ」から教材のダウンロードと完成した教材を「講義ページ」へアップロードする方法を覚える。

*本システムの「講義ページ」は(図1)参照。



図1 Campus Partner 講義サイト画面(日本語表現の基礎Ⅱ)教員用

- (5) 各個人の「プラットフォーム」の利用の仕方をおぼえる。
 - ・『テキスト』文書入力・アップロードの方法
 - ・『ファイル』資料の入力とアップロードの方法

*ファイル資料は、ワード文書、エクセル文

書，デジタルカメラの画像，スキャナーで読み込んだ画像等が対象になるが，ここでそれらの情報周辺機器や，アプリケーションの使い方に馴れることも目的とする。

*個人のプラットフォームは図2 学生用，図3 教員用を参照。



図2 Campus Partner 学生のプラットフォーム画面



図3 Campus Partner 教員のプラットフォーム画面

*学生達は，ワード，エクセルは情報文書処理演習の講義で学習している。

(6) インターネット，他のサイトへのリンク
個人が作ったページを，講義ページへリンクさせたり，インターネットで検索した情報を自分のページへリンクさせたりすることを覚える。

・HTML 言語の基礎的理解と習得

(7) 様々な局面で 辞書 CD などを利用する

(8) 本システムの各自の『個人ページ』の

管理と拡張に努力し，自己の責任において運営，交流する。

・個人予定の入力，講義時間割の作成，個人情報の管理等，様々な本システムの利用を考えて使っていく。

7 講義の実践

〔別表〕に各時間毎の活動を示した。この他，各時間の課題のためのシステム利用のほかに，『講義の広場』へ意見や，質問を書き込み，交流をすることを自主的におこなうように学生にうながした。

また，分担担当調査の項目は，落語「茶漬閻魔」を理解するのに最低必要な事項を全員で出し合い，話し合った末に，以下の9項目に決定した。

- 1 米朝・上方落語
- 2 閻魔・閻魔庁・地獄
- 3 隣保（語義について）
- 4 キリスト教
- 5 釈迦・仏教
- 6 精進料理，カレー
- 7 遊郭，遊里，御茶屋
- 8 極楽
- 9 芥川龍之介「蜘蛛の糸」

また，この項目の担当分担は，各個人の自主性をおもんじて，各自の興味で選択させた。

たとえば，「隣保」という語に関して，受講生達は皆聞いたことがないと言っていたが，一人の学生が，自分の出身地で，母や，周りの大人が使うのを聞いたことがあるので，調べてみたいと申し出た。彼女はその調査の為に実家に帰り，周囲の人達に聞き取り調査をしてきて，報告書を書いてくれた。

また，キリスト教関係は，高校時代キリスト教の高校に通っていた学生が，精進料理は実家がお寺であるという学生が申し出た。

このように、自分の興味と深く係わせながら、物事に取り組んでいると、興味もいっそうわいてくるのではないかと考えた。

8 講義目標への達成度

落語という素材を扱うことは、わかっていなくても「わかっている」と言ったり、「わかっている」と思い込むことが出来ない局面が多くある。背後に笑いがあるのに、自分が笑えないという事実を、落語を聞いてイヤでも突きつけられるということである。

そういう意味で、導入を落語で行った事は効果的であった。

また、開講時受講生20名のうち、落語を今までに聞いたことがある学生が一人もいなかったことはすこし驚かされたが、この講義でその存在をしり、面白さも多少なりとも知ってくれたことは、文化を学ぶ目的をもつ「文化情報メディア学科」としても意義深いことである。自己の知識不足への素直な反省と、カルチャーを真に享受することの喜びをすることは、文科系とくに文学を志す学生にとって最も大切な精神を学ぶことにつながると思うからである。

読めない漢字をそのままに放置したり、知らない言葉も自己の知識の範囲内のみでわかった気分になるという姿勢は、学生ならずとも常であるが、音を聞き取り、それを漢字に変換していくという学習の段階を経ることにより、そのような手抜きをすることなく、自分の力で辞書を引き、確認する姿勢が要求され、日本語の基礎的な講義として必要な学習方法であった。

一例としてあげるが、松本留五郎が蓮池にたどりついた時の描写で、
「こちらには蓮池がございます、七宝の池でございますね。これがその楼閣をうつしているのでございます。砂がぴかーぴかーと光っ

ておりまして、朱塗りの回廊でございます。」という箇所があるが、ここを、ひらがな文から漢字仮名交じり文に変換しているときのこと、一人の学生が、「いさご」はどんな漢字をあてるのかと質問したので、辞書をまず引くように指示したが、別な学生に聞くと即座に「さかなの名前じゃないですか？」と答えたのである。たしかに、「魚の鱗が蓮池のなかで日をうけて光っている」とたくましい想像をしたのであろうが、まずは、「いさご」なる魚が確認されなければならない。このようなあやふやな知識でものを読んで納得すると言う局面は非常に多いと思われる。

しかし、本システムを用いた講義では、このようにあやふやな理解をしていても、各学生が作った「漢字仮名交じり文」は本システムの「講義ページ」に示される。教授者がそれをチェックして、講義のなかで学生に注意を促したり、受講生同士が別な学生の成果を己のものと同様の事が可能になっているので誤りを正すチャンスがある。

また、毎回、感想や、意見、質問を本システムの「講義の交流」のページに入力させ、それを平常点として評価を積み上げてきたので、時を選ばず思いつくたびに自分の意見を発信することができ、講義の内容の質問や、それを離れた連絡や意見交換を通じて文章を書くことに馴れていった。

特に素材にとりあげた「落語」に限って言うと、単に「大衆娯楽」といってしまえば、それだけのものであるが、それさえも満足に理解できず、落語をきいているおじさん、おばさん（学生の側からはそう思っているだろう）とさえ、笑いを共有できないということに気づくことは、まずは大切な事である。

(7)

次にシステムを用いたことによる教育効果

について述べたい。

今や、インターネットで、ネットサーフィンをすることは日常茶飯事になっている学生もたくさんおり、講義に関する情報も学生から積極的にもたらされた事も多かった。

今回の講義に関しては、上方落語のサイト、精進料理の写真、蜘蛛の糸のデジタル映像等、最新かつビジュアルな資料が手にはいり、「百聞は一見に如かず」という言葉どおり、ビジュアルな資料は強い説得力をもち、興味を持たせる効果が大きいので、インパクトの強い講義内容にできた。

例として、上方落語が文字化されている、サイトを学生が見つけて、「講義ページ」にリンクをはったので、それを用いて、第7講は、ビデオを見るまえに、事前にそのサイトで、「代書屋」と「地獄八景亡者戯」の内容を把握しておけた。

つぎには、毎週単位で課題を出すことによって、毎週取り組む姿勢が身につく。

つまり、課題をこなさないと次へいけない、次の講義に出られないということになる。

(実際には、学生にとっては大変で、その噂をきいた1年生が、私の講義をだれも履修しないという現象が起きているという困った一面もあるが。)

このような教育支援システムを用いることにより仲間の考えていることを知り、情報交換ができる手段が講義時間以外に拡大しているわけで、24時間講義のケアができ、忙しい日々をこなす大学教員には最適である。

また、「はじめに」でも記したように、情報機器をあつかう技術は一人で学ぶよりも、教え合い、学び合うことによってより時間の無駄なく、ストレスも少なく習得できる。

(8)

以上、本システムを用いて情報の技術を得ながら、同時に日本語表現の講義を行う為のプログラムを模索して半期講義を行った結果を報告したが、その中で今後ぜひ検討していきたい点を提示してみたい。

毎回課題の提出があったが、学生によって提出がバラバラであったり、未提出であったりと、足並みがそろわないことがあり、自動的に提出物のチェックができる機能が必要と感じた。また出席チェックも学生の側にも、教員の側にも、提示できることが、望ましい。出席チェックに関しては、その後、この論文を書いている段階では、新しく「Campus Partner」に機能追加をした。

また、今回の講義の8時間目、9時間目の反省をふまえて。システム内で比較検討しながら文書を作成できると、より使いやすいのではないかと二画面表示で文書作成可能な方法を考えた。現在これに関しては、ウェブ上で試作モデルを作り検討中である。

最後に今回の講義では、その講義の目的上、現代語を用いた素材を取り上げたが、日本の古典文学を研究課題とする私個人の興味と必要性から、古典文学の講義で用いる方法を今後模索したいと考えている。

〔別表〕

時間	本時の学習の目的	学習内容	利用した機能 その他	備考
1	1 落語を聞く 2 感想を書く 3 システムで発信する。	落語 桂枝雀「茶漬け閻魔」をビデオでみる 1 感想, 意見を書く(自分のパソコンで) 文化メディア専攻・・・システムで教員に送る。(『レポート提出機能』は昨年利用している) 書法メディア専攻・・・書法メディアは1年次にインターネット及び本システムの利用をしていないのでまずは紙媒体で感想を提出させる。 2 背後に笑いがあるところの意味を考え個人で理解できなかった箇所や笑いの意味がわからなかったところをチェックする。		ビデオ教材「枝雀落語大全」第24集 TOSHIBA EMI 昭和61年11月9日放送 ABC「枝雀 寄席」(ABCホール)より収録
2	1 音声を聞いて正確に表現する。	落語「茶漬け閻魔」をCDで聞く。 1 CDを聞きながら打つ(早うち, タッチタイピングの練習) 1) とりあえず音のみ認識してひらがなで入力する。(テープ起こしの要領で) 2) 耳で聞いて漢字を想起して変換しながら入力する。(これはかなりタッチタイピングができないと, むづかしい。) 2 笑いのある箇所の再チェックと笑いを分類する。 1) おかしさ・笑いの原因が理解できない箇所 2) 知識の不足等で意味がわからない箇所 3) マニアックな情報をしらない(とりあえずしなくてもかまわないが, 知っていないと笑えない情報)	「メディアブレーヤ」等	落語CDは「枝雀落語らいぶ」から 平成4年7月14日 大阪サンケイホールにて収録
3	1 2時間目の継続 落語を聞いて打ち込む。	落語「茶漬け閻魔」をCDで聞く 1 2時間目の継続で, CDを聞いて「ひらがなのみの文」を打ち込む。 2 「ひらがなのみの文」を意味を考えながら「漢字仮名交じり文」に変換していく。 変換にあたって, 辞書を引く努力をする。(辞書CD-ROM 辞書・事典類)	辞書 CD-ROM (Bookshelf)	
4	システムの機能の使い方(1)	「漢字仮名交じり文」の作製と情報処理 1 聞き取りを講義でやっていると, 時間がかかるので, システムの『講義ページ』に教員が作成した「ひらがなのみの文(テキスト文書)」を示す。 2 各自学生は各自のパソコンにダウンロードし, 変換後システムの『講義ページ』にアップロードする。	本システムの各機能	

4	システムの機能の使い方(2)	<p>(1) システムへのアップロードの各種の方法を試みる</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) ワード文書を、各自のパソコンに取り込み、変換してワード文書としてアップロード 2) テキスト文書を自分の『個人ページ』にダウンロードして、システム内で変換処理をしてテキスト資料として送る 3) 各自の「個人ページ」の『情報整理箱』にアップロードしたものにリンクさせる。 <p>* 上記の3つのどの方法もできるようにする。</p>	本システムの各機能	
5	「何故笑えなかったか」の原因になっている不明の事項を確認して、分担する。	<p>調査項目分担(これは1ヶ月の期間で各自課外調査)</p> <p>すべての笑いの背景を理解するために調査する項目を話し合い、分担して調査する。</p> <p>調査の方法は、インターネット利用、聞き取り、図書館等の利用</p> <p>調査報告の方法の説明と練習</p> <p>『講義ページ』へおのおのリンクさせるための場所をつくる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) HTMLの基礎(日時、アドレス、題名の入力) 2) 好みで、フォント、色、サイズ等の変更 3) 写真、画像、映像等を送るために、それぞれの情報機器の使い方の勉強もする。 		調査項目は細目を9つにわけ、1項目平均2人で、別々に担当した。
6	文学作品の鑑賞	<p>文学のテキストへの理解</p> <p>「茶漬け閻魔」の背景になっている、芥川龍之介の小説『蜘蛛の糸』のテキストの収集と基礎的な理解を得る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Web、紙媒体等で収集し『講義ページ』にアップロードする方法で全員に公開する。(統一課題) <ol style="list-style-type: none"> (1) Web上のテキストにリンクする。 (2) 紙媒体・・・スキャナーでとりこむ。 (3) 自分でテキスト文書として入力。(ワード文書、Mac クラリス文書も可) 		図書館等の利用の仕方を学ぶ。
7	息抜きの日	<p>マニアックな笑いを理解するため他のビデオ鑑賞をする。</p> <p>「茶漬け閻魔」を理解するために必要な落語の知識</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 登場人物松本留五郎のプロフィール 2 「セイネンガツピ」・・・「代書屋」 3 落語における地獄とはどのようにとらえられているか?・・・「地獄八景亡者戯」 		鑑賞ビデオ ・「代書屋」枝雀 ・「地獄八景亡者戯」桂米朝

8	文学鑑賞	<p>「蜘蛛の糸」鑑賞 ウェブ上の文学素材の問題を話しあう。 学生から提供された、「蜘蛛の糸」のデジタル資料の鑑賞</p>	システム講義 ページ	「蜘蛛の糸」デジタル映像 (NHKデジスタ)
9	文学鑑賞と、テキストの比較検討	<p>紙媒体のテキストとウェブ上のテキストの比較検討をおこなう。 当初はおのおのがアップロードした様々な「蜘蛛の糸」をシステム上で比較検討する予定であったが、教授者の予想に反して、すべての学生が、ネット上の「青空文庫」からダウンロードしてきたことにより方針変更 1 復刻版「三つの寶」の「蜘蛛の糸」をコピーして全員に配布。その本文をみながら Web 素材との違いをチェックしていく。</p>	システム各機能	昭和3年6月20日発行 芥川龍之介著、小穴隆一畫『三つの寶』より
10	紙媒体の扱い方	<p>9時間目からの継続 1 紙媒体の「蜘蛛の糸」を各自の個人ページの「蜘蛛の糸」と比較検討して、違いを分類。(違いの分類は個人で考える) 1 仮名違い等の違い 2 漢字の読み方等の違い 3 内容、表現等の違い 等々 2 これを個人ページの「蜘蛛の糸(テキスト文書)」に違いを書き入れる。その際、分類毎にフォントの色を変える。・HTMLのタグを書く</p>	システム各機能	
11	調査の為の自習	<p>自習 分担提出物の調査と仕上げのための予備日</p>		
12	学習・討議	<p>分担事項についてシステム上で検討し、話し合う。</p>	システム各機能	
13	学習・討議	12時間目の継続		
14	落語鑑賞	<p>落語を聞いて思い切り笑おう CDで「茶漬け間魔」を聞き、この講義の始めに聞いたときと、どのように理解、笑い等が違って来たかを話し合う。</p>		教材は効果を考えてビデオではなくCDを選択
15	まとめ	<p>本講義の反省 1 この講義の感想と、システムを使ってみた感想や要望をシステム経由で教員に送る。 2 今回の講義に係わって調査した Web サイトをまとめてリンク集を作り、『個人ページ』に登録する。 3 『個人ページ』の充実等</p>	システム『レポート提出機能』『個人ページ』	